



Title	大地のエピステモロジー——バシュラール、カンギレム、ダゴニエに依拠した空間の価値論——
Author(s)	上野, 隆弘
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/91894
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 上 野 隆 弘 ）	
論文題名	大地のエピステモロジー——バシュラル、カンギレム、ダゴニエに依拠した空間の価値論——
論文内容の要旨 本論文は、ガストン・バシュラル、ジョルジュ・カンギレム、フランソワ・ダゴニエというフランス・エピステモロジーに属する哲学者に依拠し、哲学史上重要な概念である「大地」について考察するものである。本論文は、序論と結論を除く三部、八章から構成されている。 序論では、本稿がバシュラルの論じた「空間の価値」という主題を継承すると同時に乗り越えようとするものであることを主張した。バシュラルは、空間の価値という主題を詩学でのみ扱ったためそれを私秘的な領野に限定せざるをえなかった。バシュラルが個人的な空間で論じた価値の問題を具体的な空間、すなわち現実のこの大地で論じることが本稿の目的となる。その作業は主にカンギレムを媒介としたダゴニエによって展開されることを示唆し、特にダゴニエの『具象空間の認識論』に依拠することを予告した。次に、こうした作業が哲学的に見ても重要な試みになることを確認した。哲学史を瞥見すると哲学者の大地に関する扱いが変化していることがわかる。哲学者は、十八世紀から十九世紀を境に大地を経験的な対象として扱うことから象徴として扱うことに移行する。ロマン主義の影響を受けたバシュラルは、後者の意味で大地を扱っている。これに対して、ダゴニエは経験科学の対象としての大地を再考しようとしている。ダゴニエに依拠してバシュラルの空間の価値の問題を考察することは哲学史上におけるこの概念の分裂を縫合することを意味する。 第一部では、バシュラルの詩学を検討することでその意義と限界を指摘した。第一部第一章では、空間の価値について論じるというバシュラルの独創的なアイデアが「元素の詩学」と呼ばれる一連の論考、とりわけ、地のエレメントを中心に構成されていることを示した。第一部第二章では、これまで注目されてこなかったバシュラルの版画に対する論評を取り上げ、その風景論について論じた。バシュラルは、版画を高く評価しつつも詩の分析に留まったことを確認し、そこに方法論上の限界があることを指摘した。端的に述べてバシュラルは、大地の物質性を取り逃がしてしまっている。これを乗り越えたのがダゴニエである。ダゴニエの全ての意義を理解するためにバシュラルとカンギレムのエピステモロジーを検討する必要性を主張し、第一部は幕を閉じる。 第二部では、バシュラルとカンギレムのエピステモロジーを検討することで彼らの哲学が実証主義との格闘を通じた価値論の樹立を目指していることを明らかにした。第二部第一章では、バシュラルのエピステモロジーの概略を整理し、それに向けられる批判を確認した。第二部第二章では、バシュラルが科学的思考の規範から逸脱する誤謬に固有の価値を与えていることを示した。これにより科学主義的な態度をとるバシュラルのうちにも哲学が独自の役割を果たしていることを示した。第二部第三章では、カンギレムがバシュラルの誤謬論を継承することで奇形論を展開していることを示した。バシュラルとカンギレムは、規範から逸脱するものに価値を付与している点で共通している。既存の価値体系の外部に目を向ける彼らの思想は、「奇形の哲学」と形容しうるものである。このように、これまで「科学認識論」と訳されてきたフランス・エピステモロジーの狙いが、一種の価値論にあることを示したのが第二部の成果である。 第三部では、第二部の議論を引き受けた上で、ダゴニエの哲学をバシュラル、カンギレムとの関係で理解し、そこに価値論を見出した。第三部第一章では、奇形学に関するダゴニエの科学史研究を精査した。それを通じて、ダゴニエの思想がバシュラルやカンギレムとは異なり規範的な思考から距離を置いていることを確認した。第三部第二章ではダゴニエにおける「表面の哲学」と「物質学」の関係を扱った。それにより、あらゆる事物を存在論的かつ価値論的に同等に扱うその思想が、結果として既存の価値体系に批判的な眼差しを向けるものであることを明らかにした。第三部第三章では、序論で予告しておいたダゴニエの『具象空間の認識論』の分析をおこなった。ダゴニエは、バシュラルに見られる風景論をノスタルジーに染まったものとして批判している。ダゴニエにおけるノスタルジーへの批判をその最初期からなされていた自然主義批判と共に理解した。以上の検討を踏まえ、最後にダゴニエが大地に物質性を与え返すことで本来性なき大地を志向していることを主張した。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 （ 上 野 隆 弘 ）			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	檜垣 立哉
	副 査	教授	藤川 信夫
	副 査	教授	村上 靖彦
	副 査	学外委員	中村 大介(豊橋技術科学大学総合教育院准教授)

論文審査の結果の要旨

上野隆弘君の博士論文「大地のエピステモロジー バシュラル、カンギレム、ダゴニエに依拠した空間の価値論」は、フランスにおける科学哲学の領域であるエピステモロジーにおいて、「大地」という、古代ギリシア以来重要な思考のエLEMENTとされる概念を軸としながら、科学論において重要な「誤謬」「奇形」という主題をもう一つの柱とし、バシュラル、カンギレム、ダゴニエという、19世紀後半から21世紀までのフランスエピステモロジーの展開を一貫して描ききったものであり、十分な労作として評価できる。フランスエピステモロジーは、華々しい思想史的スターを輩出したフランス現代思想のなかでも、また科学哲学のなかでも傍流的な位置づけを与えられており、その研究が十分に進められているとはいえない。とりわけバシュラルやダゴニエなどは、その内在的な研究はほとんどおこなわれていないのが現状である。その意味でも、本論文は、フランスエピステモロジーもつ潜在力にひとつの方向から光をあてたものとして重要な学術的成果を示しているといえる。

本論文は、全体は三部構成となっており、それぞれ、バシュラル、カンギレム、ダゴニエが主題化されて、結論において上記の議論がとりまとめられている。

序文においてはバシュラルによって大地概念がひきたてられたことの意義、それが時間空間の両者を統合するものであること。そのELEMENT論が、エピステモロジーの歴史において重要な意味を持つことが示される。

第一部においては、バシュラルの思想における科学哲学と詩論という一見するとまったく異なったものが同居することへの分析や、物質的想像力から力動的想像力への展開という問題についてあつかわれ、とりわけ力動的想像力の議論においては、ショーペンハウアーの位置づけについてこれまでにない指摘がなされるとともに、版画家であるフロコンとの関わりにおいて、大地とともに「風景」という事象にこだわるバシュラルのあり方がとりあげられる。現代においてもトゥアンやサイドに引用されるバシュラル独自の大地風景概念の淵源がここで探られて、本論考のおおきな方向づけがなされている。

第二部においては、カンギレムがあつかわれる。一般的には、バシュラルのエピステモロジーにおいては物理学と化学が重要であったのに対し、生物学を主な主題としたカンギレムとバシュラルとは、さまざまな面で対照的な部分をもつが、そこではまずはバシュラルのエピステモロジーの特徴が、現代のクーンやセールなどとの対比で描かれたのちに、認識の誤謬の学にこだわるバシュラルと、生物学的な正常性と異常性の議論を展開し、奇形論への道を開くカンギレムの議論が詳細に検討されていく。

第三部のダゴニエの議論において、バシュラル、カンギレムに引き続きつつ、奇形学を展開し、18世紀のフランス生物学史のなかでキュヴィエとの論争史において軽視されてきたジョフロワ・サンティレールなどをもち出しながら上記の議論がさらに展開される。その後に、ダゴニエにおいて特徴的なこととして、バシュラル的な垂直的力動性に対して、「表面」の価値論を強く押し立てたことが示される。それはある種の科学的認識における、ヒエラルキー的な序列の排除、全てを平面的な等価性のもとにおく姿勢であるとされ、ダゴニエの独自性が示されるとともに、最後に、バシュラルとも関連のあるルプネルの風景論についてのダゴニエの議論がとりあげられ、全体がとりまとめられる流れになっている。

結論部においては上記の議論をとりまとめつつ、力動的な垂直性から、ヒエラルキーなき表面性へという仕方でエピステモロジーの議論が展開されていったことを二一世紀的な意義のなかでとらえ返し全体の議論がまとめられている。

総じて、バシュラールの試論と科学論の統合、大地という想像力論の展開、誤謬論や奇形論の意義という、科学哲学にとって非常に重要な主題を、フロコンやルプネル、あるいはジョフロワ・サンチレールなどを参照しつつ展開した論考であり、その議論の稠密度や一貫性においてもまとまりのよいものであるとして評価できる仕上がりになっている。今後のエピステモロジー研究の進展をさらに期待したい。

以上、論文審査の結果、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。